

脳ドックのMRIで偶然に見つかった 頭蓋内異物の1症例

みず た まさ よし お がわ ひろ し
水 田 正 能¹⁾ 小 川 広 志²⁾
いけ だ ひで き こん どう しん じ
池 田 秀 樹²⁾ 近 藤 慎 二³⁾

キーワード：頭蓋内異物，MRI，脳ドック

要 旨

脳ドックで外傷歴の全くない男性の頭蓋内に、釘の様な金属異物を認めた症例を経験したので報告する。症例は53歳，男性。既往歴に特記することはなく，手術歴や外傷歴はなかった。MRI問診票での確認や，入室前の金属探知機のチェックでも異常はなかったが，MRIの位置決め撮影で，後頭部付近に金属反応を認めた。頭部の単純X線撮影で後頭部に約2センチの釘の様な陰影を認めた。異物は，頭蓋骨を貫通しており，幼児期の偶発的な転倒事故により，骨縫合から釘が貫通したのではないかと推測した。MRI撮影を行っていた場合に，重大な事故に発展した可能性は否定できない。

緒 言

脳ドックは，脳内の疾患を未然に発見するために行われており，MRIと頸動脈超音波による検査が行われる。MRIは磁気共鳴現象を利用した，生体に含まれる水素原子核の分布を画像化する装置であり，CTと違い被爆はないが，磁気によるリスクが存在する。第一は，米国で起こった，酸素ボンベ吸着死亡事故のような金属吸着事故であり，第二は，体内金属の存在する患者への影響で

ある。体内金属としては，心臓ペースメーカーや人工内耳，スチール製脳動脈瘤クリップなどがあり，それらの電氣的誤作動や故障，磁性体金属の牽引や逸脱，ラジオ波（radio frequency: RF以下RF）による発熱などが問題¹⁾となる。その対策は，対象となる器具の有無を，十分な問診で確認することである。また，板金あるいは旋盤作業の職業歴があった63歳の男性の眼球内金属片による失明のような事故²⁾を防ぐためには，金属加工作業の職業歴，外傷の既往歴のある患者へのさらなる詳細な問診が必要となる。

今回，脳ドックの受診の際に，外傷歴の全くない男性の頭蓋内に，釘の様な金属異物を認めた症例を経験したので報告する。

Masayoshi MIZUTA et al.

1) 安来市立病院婦人科 2) 同 医療技術部

3) 山陰労災病院脳神経外科

連絡先：〒692-0404 安来市広瀬町広瀬1931

安来市立病院婦人科